

| No. | 受理日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|--------|-----------------|---|--|
| | | | | | | | | | | | | ウシ膿ほう性口内炎ウイルス感染 | ProMED 2005年10月7日 | 2005年10月4日、ニューヨーク州Plum Islandの外來性動物疾患診断研究所は、ネブラスカ州Scotts Bluff郡にある施設で飼育されていたウシ3頭で、初の水疱性口内炎New Jersey 株(VS-NJ)感染症例を確認した。VS-NJウイルスは、発病した成牛3頭からの検体から分離された。これらの個体は、2005年ネブラスカ州で最初の水疱性口内炎症例である。加えて10月5日に、アイオワ州Amesの国立獣医学研究所は、ネブラスカ州Scotts Bluff郡にある別の施設で飼育されていたウマについて、ウイルス分離により水疱性口内炎と診断確定した。問題の2施設は同じScotts Bluff郡内にあるが、それぞれは約24マイル離れている。 |
| | | | | | | | | | | | | ウシ膿ほう性口内炎ウイルス感染 | OIE Disease Information 18(41) 2005年10月14日 | 米国における水疱性口内炎のFollow-up report No. 20。今回報告終了日-2005年10月9日。病因の同定-水疱性口内炎ウイルスタイプNew Jersey。新規アウトブレイクの詳細-Colorado州Mesa郡, Montezuma郡, Ouray郡の農場(3件)(アウトブレイクの開始日2005年9月18日, 2005年9月25日):ウマにおいて疑い例9例, 症例5例, ウシにおいて疑い例120例, 症例1例。Colorado州Big Horn郡の農場(2件)(アウトブレイクの開始日2005年9月25日, 2005年9月28日):ウマにおいて疑い例48例, 症例5例。-Nebraska州Scotts Bluff郡の農場(2件)(アウトブレイクの開始日2005年9月29日, 2005年9月30日):ウマにおいて疑い例6例, 症例1例, ウシにおいて疑い例61例, 症例3例。-Utah州Duchesne郡の農場(1件)(アウトブレイクの開始日2005年9月23日):ウシにおいて疑い例8例, 症例3例。-Wyoming州Bighorn郡, Converse郡, Fremont郡, Goshen郡の農場(11件)(アウトブレイクの開始日2005年8月15日~2005年10月1日):ウマにおいて疑い例83例, 症例11例, ウシにおいて疑い例208例, 症例4例。 |
| | | | | | | | | | | | | ウシ膿ほう性口内炎ウイルス感染 | OIE Disease Information 18(42) 2005年10月21日 | 米国における水疱性口内炎のFollow-up report No. 21。今回報告終了日-2005年10月16日。病因の同定-水疱性口内炎ウイルスタイプNew Jersey。新規アウトブレイク-Wyoming州Bighorn郡Lovellの農場(アウトブレイクの開始日2005年10月9日):ウマにおいて疑い例2例, 症例2例。-Wyoming州Carbon郡Encampmentの農場(アウトブレイクの開始日2005年10月4日):ウマにおいて疑い例5例, 症例1例。-Wyoming州Fremont郡Rivertonの農場(アウトブレイクの開始日2005年10月29日):ウマにおいて疑い例3例, 症例1例。-Wyoming州Goshen郡Torringtonの農場(アウトブレイクの開始日2005年9月29日):ウシにおいて疑い例100例, 症例1例。-Wyoming州Goshen郡Torringtonの農場(アウトブレイクの開始日2005年9月30日):ウシにおいて疑い例37例, 症例2例。 |

| No. | 受理日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|--------|-----------------|--|--|
| | | | | | | | | | | | | ウシ膿ほう性口内炎ウイルス感染 | OIE Disease Information 18(43) 2005年10月28日 | 米国における水疱性口内炎のFollow-up report No. 22: 今回報告終了日-2005年10月23日。病因の同定-水疱性口内炎ウイルスタイプNew Jersey。アウトブレイクの初回確定日-2005年4月27日。アウトブレイクの開始日-2005年4月16日。新規アウトブレイク-COLORADO州Delta郡Delta, Mesa郡Grand Junction, Montezuma郡Cortezの農場(3件)(アウトブレイクの開始日2005年10月1日, 2005年10月5日): ウマにおいて疑い例7例, 症例2例, ウシにおいて疑い例55例, 症例1例。-Idaho州Caribou郡Graceの農場(1件)(アウトブレイクの開始日2005年10月9日): ウマにおいて疑い例9例, 症例4例 -Montana州Big Horn郡St. Xavierの農場(1件)(アウトブレイクの開始日2005年10月6日): ウマにおいて疑い例2例, ウシにおいて疑い例27例, 症例4例, ヒツジにおいて疑い例37例, ヤギにおいて疑い例1例。-Utah州Summit郡Oakleyの農場(1件)(アウトブレイクの開始日2005年10月8日): ウマにおいて疑い例5例, 症例1例, ウシにおいて疑い例12例。-Wyoming州Big Horn郡Hyattville, Campbell郡Gillette, Carbon郡Encampment, Fremont郡のPavillion農場(4件)(アウトブレイクの開始日2005年9月24日~2005年10月10日): ウマにおいて疑い例23例, 症例4例, ウシにおいて疑い例350例, 症例2例。 |
| | | | | | | | | | | | | ウシ膿ほう性口内炎ウイルス感染 | OIE Disease Information 18(44) 2005年10月30日 | 米国における水疱性口内炎-Follow-up report No. 23: 今回報告終了日-2005年10月30日。病因の同定-水疱性口内炎ウイルスタイプNew Jersey。新規アウトブレイク-COLORADO州Delta郡Crawford, Mesa郡Grand Junctionの農場(2件)(アウトブレイクの開始日2005年10月17日, 2005年10月28日): ウシにおいて疑い例31例, 症例2例, ウマにおいて疑い例10例, 症例1例。-Nebraska州Scotts Bluff郡Lymanの農場(アウトブレイクの開始日2005年10月12日): ウシにおいて疑い例16例, 症例1例, ヒツジにおいて疑い例251例。-Utah州Box Elder郡Park Valleyの農場, Duchesne郡Bluebell農場(2件)(アウトブレイクの開始日2005年10月20日, 2005年10月18日): ウマにおいて疑い例23例, 症例8例, ウシにおいて疑い例3例, ブタにおいて疑い例12例。-Wyoming州Big Horn郡Burlington, Carbon郡Encampment, Sweetwater郡McKinnenの農場(3件)(アウトブレイクの開始日2005年10月12日~2005年10月18日): ウマにおいて疑い例58例, 症例2例, ウシにおいて疑い例470例, 症例8例。 |

| No. | 受理日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|--------|-----------------|--|--|
| | | | | | | | | | | | | ウシ膿ほう性口内炎ウイルス感染 | OIE Disease Information 18(46) 2005年11月18日 | 米国における水疱性口内炎—Follow-up report No. 24: 今回報告終了日—2005年11月13日。病因の同定—水疱性口内炎ウイルスタイプNew Jersey。新規アウトブレイク—Colorado州Eagle郡Burns, Garfield郡Rifle, Mesa郡Collbran, De Beque, Grand Junction, Montezuma郡Dolores, Ouray郡Ridgewayの農場(8件)(アウトブレイクの開始日2005年10月5日, 10月21日, 10月22日, 10月25日, 10月27日, 10月30日): ウシにおいて疑い例719例, 症例4例, ウマにおいて疑い例43例, 症例5例。—Montana州Big Horn郡Hardinの農場(1件)(アウトブレイクの開始日2005年10月5日): ウシにおいて疑い例200例, 症例4例。—Wyoming州Natrona郡Casperの農場(1件)(アウトブレイクの開始日2005年10月30日): ウマにおいて疑い例10例, 症例2例。—Wyoming州Park郡Powelの農場(1件)(アウトブレイクの開始日2005年10月7日): ウシにおいて疑い例100例, 症例5例, ウマにおいて疑い例1例, 症例0例。—Wyoming州Sweetwater郡McKinnenの農場(1件)(アウトブレイクの開始日2005年10月10日): ウシにおいて疑い例500例, 症例3例。 |
| | | | | | | | | | | | | ウシ膿ほう性口内炎ウイルス感染 | OIE Disease Information 18(49) 2005年12月9日 | 米国における水疱性口内炎—Follow-up report No. 25: 今回報告終了日—2005年12月4日。病因の同定—水疱性口内炎ウイルスタイプNew Jersey。新規アウトブレイク—Colorado州Delta郡Deltaの農場(アウトブレイクの開始日2005年11月14日): ウマにおいて疑い例4例, ウシにおいて疑い例5例, 症例1例。—Colorado州Montrose郡Olatheの農場(アウトブレイクの開始日2005年11月15日): ウマにおいて疑い例3例, ウシにおいて疑い例10例, 症例1例。—Wyoming州Johnson郡Kayceeの農場(アウトブレイクの開始日2005年11月1日): ウマにおいて疑い例6例, ウシにおいて疑い例18例, 症例1例, ヒツジにおいて疑い例4例。—Wyoming州Natrona郡Evansvilleの農場(アウトブレイクの開始日2005年11月6日): ウシにおいて疑い例47例, 症例3例。 |
| | | | | | | | | | | | | ウシ膿ほう性口内炎ウイルス感染 | OIE Disease Information 19(2) 2006年1月12日 | 米国における水疱性口内炎—Follow-up report No. 27: 今回報告終了日—2005年12月31日。病因の同定—水疱性口内炎ウイルスタイプNew Jersey。新規アウトブレイク—Colorado州Delta郡Deltaの農場(アウトブレイクの開始日2005年11月14日): ウマにおいて疑い例4例, ウシにおいて疑い例222例, 症例3例。 |
| | | | | | | | | | | | | 結核 | ProMED20060201-0040 | 米国農務省USDAは、症例確認を受けて、ミネソタ州を家畜(ウシ)に結核の存在しない(TB-free)州の地位から降格させる。 |

| No. | 受理日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原料料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|--------|---------|--|--|
| | | | | | | | | | | | | BSE | カナダ Public Health Agency 2006年4月13日 | 2006年4月13日、カナダ食品検査庁(CFIA)はカナダのウシにおける5例目のBSE症例を確認した。この発見により、カナダにおけるヒトの健康に対する新たなリスクはもたらされていない。vCJDに関するQ&Aとして、ヒトの健康に対するリスク、将来的にカナダにおいてvCJD症例は発生するか、マウスの臓器内でプリオンが確認された最近の研究がヒトの健康に関して意味するもの、などが記載されている。 |
| | | | | | | | | | | | | BSE | ProMED20060124-0040 | カナダ食品監視局(CFIA)は1月23日、Albertaで生まれ育った6才雑種雌牛が狂牛病であることを確認した。当該牛のいかなる部分も食品や他の動物の餌にはなっていない。このウシは国家サーベイランスプログラムにより発見された。同プログラムにより2003年の第1例以来87000頭以上の牛が検査された。 |
| | | | | | | | | | | | | BSE | ProMED20060314-0020 | ウェスタンブロット法により米国アラバマのウシが狂牛病であったことが明らかとなった。ウシはSanta Gertrudis種の10才を超えるウシで、1997年の肉骨粉禁止前に生まれたとみられる。獣医が最初に見たときにヘタリウシであったが、その後も改善しないため安楽死させ、検体採取していた。Clifford獣医主任による狂牛病感染牛の発症、感染から検査結果確認までの経過報告では、米国産牛肉は非常に安全であることが強調された。 |
| | | | | | | | | | | | | BSE | FDA Statement 2006年3月13日 | BSEの陽性の検査結果についての米国農務省(USDA)の発表に関する米FDAの声明。2006年3月13日の米国農務省(USDA)によるBSE陽性ウシの発見確定を受け、FDAは連邦当局および州当局と共同で、このウシが摂取した飼料の由来を調査している。USDAはこのウシが飼料もしくはヒトの食糧供給に入っていないことも確認したこと、最近FDAはヒトの食品および化粧品におけるウシの特定部分の使用を禁止する予防策を追加したことなどについて記載されている。 |

| No. | 受理日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----------|-------|---------------|----------------|----------------|---------|-----------------|------|----|----|--------|---------|---|---|
| | | | | | | | | | | | | BSE | OIE Disease Information 19(11) 2006年3月16日 | 米国におけるBSE:(米国における前回のBSEのアウトブレイクがOIEに報告された日時:2004年11月, および確定された日時:2005年6月)今回報告日-2006年3月13日。アウトブレイクの初回確定日-2006年3月13日。アウトブレイクの開始日-2006年2月27日。アウトブレイクの詳細-Alabama州の農場(アウトブレイクの開始日2006年2月27日):ウシにおいて疑い例50例, 症例1例, 処分1例。感染群-約50頭の肉用ウシおよび子ウシの群の肉用ウシ1頭(10才以上)。アウトブレイクの原因/感染源-不明もしくは結論に到達していない。その他の詳細/コメント-米国において報告されたBSEの2例目の確定例である。 |
| 116 | 2006/4/26 | 60116 | セローノ・ジャパン株式会社 | ソマトロピン(遺伝子組換え) | ソマトロピン(遺伝子組換え) | C127細胞株 | スイス | 有効成分 | 無 | 無 | 有 | | | |
| 117 | 2006/4/26 | 60117 | セローノ・ジャパン株式会社 | ソマトロピン(遺伝子組換え) | トリプシン | ブタ臓腑 | 英国、米国、カナダ、デンマーク | 製造工程 | 無 | 無 | 有 | | | |
| 118 | 2006/4/26 | 60118 | セローノ・ジャパン株式会社 | ソマトロピン(遺伝子組換え) | C127細胞株 | マウス細胞 | スイス | 製造工程 | 無 | 無 | 有 | | | |
| 119 | 2006/4/26 | 60119 | 日本赤十字社 | 人血小板濃厚液 | 人血小板濃厚液 | 人血液 | 日本 | 有効成分 | 有 | 有 | 無 | HIV | J Med Virol 2006; 78: 311-317 | ドイツで初めてB/Gサブタイプ間組換え型ヒト免疫不全ウイルス1型(HIV-1)が同定された。このウイルスは、NucliSense HIV-1 QT assay (Organon Tecknika/bioMerieux)では検出不能であり、Monitor v1.5 test (Roche Molecular Systems)ではLCx HIV RNA Quantitative assay (Abbott Laboratories)に比べ有意に低値を示した。プライマーとプローブ結合部位でのヌクレオチドの不整合が、定量差の原因である。HIV-1の遺伝的多様性がアッセイにおける検出と定量に影響を与えることに注意すべきである。 |

| No. | 受理日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|--------|---------|---|---|
| | | | | | | | | | | | | 細菌感染 | Clin Microbiol Infect 2005; 11: 919-924 | スペインの2つの大病院で行われた成人における肺炎連鎖球菌菌血症回顧試験で、1020件中108件(10.6%)が病院内肺炎球菌血流感染(NPBI)と同定された。この内77例のデータが分析可能であったが、入院後、血液培養が陽性になるまでは3~135日(中央値17日)で、基礎疾患は悪性腫瘍(31%)、慢性閉塞性肺疾患(28.6%)、心不全(16.9%)、慢性腎不全(15.6%)、肝硬変(13%)、HIV感染(13%)であった。患者の31.2%が重度の敗血症、11.7%が敗血症ショック、3.9%が多臓器不全を呈した。原因菌の血清型のうち、78%は23価多糖体ワクチンに含まれていた。35名(45.5%)の患者が死亡し、そのうち21名(27.3%)がNPBIに関連すると考えられた。 |
| | | | | | | | | | | | | 細菌感染 | Transfusion 2005; 45: 1845-1852 | 2004年3月にアメリカ赤十字の36の地域血液センターすべてにおいて、成分採血由来の血小板製剤における細菌汚染についてルーチンの品質管理試験を行った。細菌試験の最初の10ヶ月で350,658例中226例が初期陽性であった。初期陽性のものでつき再度検体採取したところ、68例で細菌汚染が確認され、陽性率は0.019%であった。単離された細菌はブドウ球菌属(47.1%)、連鎖球菌属(26.5%)、グラム陰性菌(17.6%)であった。スクリーニングで陰性であった成分に対して、敗血症性輸血反応と疑わしい症例が3例特定され、これらはすべてコアグラゼ陰性ブドウ球菌が原因とされた。 |
| | | | | | | | | | | | | 細菌感染 | Transfusion 2006; 46: 305-309 | 血小板供血歴の長い、無症候性の58歳男性由来の血小板が単球症リステリア陽性であった。パルスフィールドゲル電気泳動パターンはCDCデータベース中の他の2例の単球症リステリア分離株と一致したが、疫学的な関連性は見られなかった。 |
| | | | | | | | | | | | | 感染 | Eurosurveillance 2005; 10(11): 051110 | 1999年以来、スウェーデンでは梅毒症例数が増加している。男性と性交渉する男性の間で激増しているため、2004年は前年比7%増の192例で、1980年代半ば以来最高となった。感染の60%は男性間性交渉、38%は男女間性交渉によるもので、約半数(97例)がストックホルム郡で報告されている。ストックホルム郡外の症例のうち2例は海外で血液製剤により感染した。 |
| | | | | | | | | | | | | マラリア | ProMed20051015-0070 | フランス人旅行者1名が2005年8月~9月ドミニカ共和国東部を旅行した後、熱帯性マラリアを発症した。マラリア薬の服用歴はない。過去12ヶ月以内に輸血、臓器移植歴もない。 |

| No. | 受理日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|--------|---------------|--|--|
| | | | | | | | | | | | | インフルエンザ | AABB Weekly Report 2006; 12(2): 1-3 | 2006年1月5~6日に米国保健省血液安全安定供給諮問委員会で、インフルエンザの大流行とその血液供給に及ぼす影響について議論された。特に短期生存型血小板の供給が脅かされることが強調された。また血液供給者の潜在的ウイルス感染問題も含めて、安全な血液供給に関する研究がさらに必要であるとされ、保健省が取り組むべき対応策を可決した。 |
| | | | | | | | | | | | | 鳥インフルエンザ | Nature 2005; 437: 1108 | 2005年2月、ベトナムのトリインフルエンザ感染者においてオセルタミビルに耐性を示すH5N1型ウイルスが発見された。患者は予防量から開始し、のち高用量(治療量)投与され、回復した。高用量投与後はウイルスは分離されなかった。フェレットに感染させた実験で、オセルタミビル耐性ウイルスはザナミビルには感受性を示した。 |
| | | | | | | | | | | | | 鳥インフルエンザ | WHO http://www.who.int/csr/don/2006_02_21b/en/index.html | トリインフルエンザの流行がアジア、アフリカ、ヨーロッパの国々に広がっている。2006年2月以降に初めてトリのH5N1感染を報告した国は、イラク、ナイジェリア、アゼルバイジャン、ブルガリア、ギリシャ、イタリア、スロベニア、イラン、オーストリア、ドイツ、エジプト、インド、フランスの13カ国にのぼる。 |
| | | | | | | | | | | | | バルボウイルス | Clin Infect Dis 2005; 41: 1201-1203 | バルボウイルスに急性感染後のウイルス動態の再評価により、症状が早期に消失したにもかかわらず、本ウイルスは宿主から急速には除去されないことが示された。 |
| | | | | | | | | | | | | クロイツフェルト・ヤコブ病 | J Virol 2006; 80: 322-331 | 酸性ドデシル硫酸ナトリウム(SDS)によるプリオンの不活性化について検討した。ハムスターSc237プリオンおよびヒト散在性クロイツフェルト・ヤコブ病(sCJD)プリオンの酸性SDS暴露による不活性化には、SDS濃度、暴露期間、温度が関係した。ヒトsCJDプリオンはハムスターSc237プリオンに比べ、不活性化に10万倍以上抵抗性を示した。ステンレス鋼線に付着したヒトsCJDプリオンは酸性SDSとオートクレーブの併用で除去された。この知見は手術器具や歯科用機器などのプリオン不活性化に適したシステムの基礎となる。 |

| No. | 受理日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正 使用 措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|----------------|-------------------------|----------------------------------|--|
| | | | | | | | | | | | | 異型クロイツ フェルト・ヤコブ 病 | Nat Med 2005; 11: 982-985 | PrPscをPrPcで増幅するPMCA(protein misfolding cyclic amplification)法を自動化し、PrPscの増幅率を向上させた。標準的な検出方法で140PMCAサイクルで感度が6600倍上昇、2回連続で繰り返した場合、感度が1000万倍に上昇し、PrPscの8000分子相当が検出可能となった。この方法で、スクレイパー感染ハムスターの血液中PrPsc検出に成功した。血液中でPrPscが生化学的に初めて検出され、プリオン病を早期診断するための非侵襲的方法の開発が見込まれる。 |
| | | | | | | | | | | | | 異型クロイツ フェルト・ヤコブ 病 | Nature 2005; 437 257-261 | 伝達性海綿状脳症(TSE)におけるPrPを含む凝集体のサイズと、感染性及び変換活性との関係を調べたところ、14-28PrP分子に相当する凝集塊を持つ非線維粒子がTSEの最も有効なイニシエーターであることが示唆された。 |
| | | | | | | | | | | | | 異型クロイツ フェルト・ヤコブ 病 | J Virol 2005; 79: 13794-13796 | 慢性消耗病(CWD)感染ミールジカの脳組織を、リスザルの脳内に接種したところ、リスザルは進行性神経変性疾患を発現した。リスザルの脳組織にはPrPresが検出され、海綿状変性が認められた。霊長類にCWDが感染した初めての報告である。 |
| | | | | | | | | | | | | 異型クロイツ フェルト・ヤコブ 病 | Nat Med 2005; 11: 1137-1138 | イタリアのサッサリ地方で飼育されている818頭のヒツジについて調べたところ、そのうち261頭がプリオン病に対する感受性を与えるPrnp対立形質を有していた。7頭が明らかなスクレイパーであったが、脳、リンパ節、扁桃腺でPrPScが検出された。スクレイパーのヒツジ全てと無作為に選んだ健康なヒツジ100頭について乳腺を組織学的に調べたところ、乳腺炎とスクレイパーを併発していた4頭では乳腺においてPrPScが検出された。30 km離れた別の群れのヒツジ272頭についても同様の調査を行ったところ、1頭が同様の所見を呈した。慢性的な炎症とスクレイパーの併発により、PrPScの沈着が予期せぬ組織に広がることが示された。 |
| | | | | | | | | | | | | 異型クロイツ フェルト・ヤコブ 病 | ProMED20060112 -0070 | 英国保健省の月間統計によると2006年1月6日時点でCJD死亡患者総数(BSEと関連があると思われるvCJDを含む)は153例で、内訳はvCJD確定例における死亡患者109例、vCJD可能性例における死亡患者(神経病理学的に未確定)43例、vCJD可能性例における死亡患者(神経病理学的確定実施中)1例であった。存命中のvCJD患者は6例で、vCJD確定例および可能性例総数は159例で前月から変化はなかった。 |

| No. | 受理日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|--------|-----------------|---|--|
| | | | | | | | | | | | | 異型クロイツフェルト・ヤコブ病 | 英国保健省 Press Statement http://www.hpa.org.uk/hpa/news/articles/press_releases/2006/060209_cjd.htm | 輸血に関連したvCJDの新たな症例が見つかった。患者は、供血後20ヶ月でvCJDを発症したドナー由来血液の輸血を受け、その約8年後にvCJDを発症した。この患者は存命中で、国立プリオン病院の医師による治療を受けている。この症例は輸血関連vCJD伝播としては3例目であり、vCJDが輸血によってヒト-ヒト感染しうることを示す新たな証拠となるだろう。これら3例は、血漿分画製剤の投与ではなく、すべて血液成分の輸血に関連している。この患者は、英国で供血後にvCJDを発症したドナーから輸血されたことが判明し生存している約30人のうちの一人だった。対象者は全員vCJD暴露の可能性があることを通知され、手術などの医療措置を介したvCJD伝播の危険を減らすための予防措置を講じるよう求められている。 |
| | | | | | | | | | | | | ウイルス感染 | J Clin Microbiol 2005; 43: 5428-5434 | 米国で1987年から1996年の間にHIV感染小児患者57例から採取し、凍結保存した末梢血単核細胞(PBMC)と2002年から2003年に健康者19例から採取した新鮮PBMCにおいてヒトパピローマウイルス(HPV) DNAを調べた。患者8例と健康者3例がHPV型16ゲノムの2つのサブグループの大部分に陽性であり、これら11のPBMC検体すべてで検出されたHPVゲノムはエピソーム型として存在した。PBMCはHPVのキャリアであり、血液を介してHPVを広めるおそれがあることが示唆された。 |
| | | | | | | | | | | | | ウイルス感染 | ProMED20060205-0040 | インド洋西部でチクングンヤウイルスによる感染症が流行している。レユニオン島では2006年1月下旬の1週間だけで1万5千人増え、計5万人に達した。モーリシャス当局はウイルスを媒介するヒトシマカの駆除を決定した。 |
| | | | | | | | | | | | | コロナウイルス感染 | Science 2005; 310: 676-679 | 2004年3月から12月に、中国の4地区から408匹のコウモリを集め、血液、糞、唾液を採取し、血清検体および糞または唾液由来cDNAを、各々独立に、異なった方法で、二重盲検により分析した。その結果、ある種のコウモリが重症急性呼吸器症候群(SARS)の病原体であるSARSコロナウイルス(SARS-CoV)に非常に近いコロナウイルスの自然宿主であることが明らかになった。これらのウイルスはSARS様コロナウイルス(SL-CoV)と名づけられ、ヒトやジャコウネコから分離されたSARS-CoVより遺伝的多様性が高い。ヒトやジャコウネコから分離されたSARS-CoVは系統発生的にSL-CoVの範疇に入り、SARS発生の原因ウイルスがSL-CoV群の一員であったことを示す。 |

| No. | 受理日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|--------|-------------|-----------------------------------|---|
| | | | | | | | | | | | | コロナウイルス感染 | Clin Infect Dis 2006; 42: 634-639 | 新規ヒトコロナウイルスHKU1は呼吸器及び腸疾患に関連する可能性があり、状態の不良な患者における持続性の無症候性感染との関連が考えられる。 |
| | | | | | | | | | | | | エボラ出血 | Nature 2005; 438: 575-576 | ガボンおよびコンゴで2001年から2003年にかけて発生したヒトと大型霊長類におけるエボラ流行時に採集された1030の小型脊椎動物において、エボラウイルスについて調べた。エボラウイルスに特異的な抗体が3種類のコウモリの血清中で検出された。エボラウイルスのヌクレオチド配列が同じ種類のコウモリの肝臓と脾臓で検出されたが、腎臓、心臓、肺からは検出されなかった。また他の動物からは検出されなかった。驚くべきことに、抗体陽性の動物はすべてPCR陰性であり、PCR陽性の動物はすべて抗体陰性であった。これはPCR陽性の動物は感染から日が浅く、免疫反応が検出できる前に検査されたためと思われる。 |
| | | | | | | | | | | | | デング熱 | ProMed20050928-0040 | 2005年9月、ベネズエラ、シンガポール、カリブ海マルチニーク島、マレーシアでデング熱が流行している。死亡者も多数でいる。 |
| | | | | | | | | | | | | デング熱 | Blood 2005; 106: Abstract #5331 | 骨髄移植後の最初の再発時に敗血症と不可逆性ショックを発症し、死後解剖でデングウイルス4型感染が判明した急性リンパ性白血病(ALL)小児患者について報告する。1994年11月にプエルトリコで兄弟からの骨髄移植を受けた6歳の少女は移植後5日目に全身紅斑、6日目に発熱を発症し、抗生物質の投与にかかわらず、不可逆的ショックを起こし、11日目に死亡した。死後解剖で血液、腹水、肝臓、脾臓からデングウイルス4型が検出され、PCRで確認された。ドナーの血液をさらに検査したところ、デングウイルス4型のIgM抗体が検出され、患者ウイルスの培養は、ドナーの急性力価と一致した。デングウイルス感染は流行地域で輸血や骨髄移植を受けた患者の死亡原因となりうる。 |
| | | | | | | | | | | | | ウエストナイルウイルス | 朝日新聞 2005年10月3日 | 厚生労働省は2005年10月3日、米国から日本帰国した男性会社員が米国で流行中のウエストナイル熱と診断されたと発表した。国内初の感染例である。 |
| | | | | | | | | | | | | ウエストナイルウイルス | CDC/MMWR 2005; 54(Dispatch): 1-3 | 2005年9月、米国で共通のドナーから臓器移植を受けたレシピエント4名中3名にWNV感染が確認された。ドナーから採取された血清および血漿サンプルの検査でWNV-IgM抗体、IgG抗体は陽性を示したが、WNV-RNAは陰性であった。 |

| No. | 受理日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|--------|-------------|--|--|
| | | | | | | | | | | | | ウエストナイルウイルス | CDC http://www.cdc.gov/ncidod/dvbid/westnile/qa/transfusion.htm | 2005年8月-9月にニューヨークとペンシルバニアで臓器移植を受けたレシピエントがウエストナイルウイルス感染した件に関連するQ&A。臓器移植による感染は、ドナーの血液が核酸増幅試験陰性、IgM、IgG抗体陽性の場合にも起こる可能性がある。 |
| | | | | | | | | | | | | B型肝炎 | 第47回日本臨床血液学会総会 2005年9月17-19日 | 化学療法および造血細胞移植療法実施後に、重篤なB型肝炎を生じた症例を複数経験した。全例とも治療前のHBs抗原は陰性であり、治療中の感染はなかった。HBs抗体およびHBc抗体陽性の症例があったことから、免疫状態の変動に伴いHBVの再活性化が生じたと推測される。 |
| | | | | | | | | | | | | B型肝炎 | 第47回日本臨床血液学会総会 2005年9月17-19日 | 移植前HBsAg陰性、HBsAb陽性で、同種造血幹細胞移植を受けた患者6例のうち1例が、移植後15ヶ月で劇症B型肝炎を発症した。このような患者ではHBウイルスをモニタリングする必要があると考えられる。 |
| | | | | | | | | | | | | B型肝炎 | 第29回日本血液事業学会総会 2005年10月12-14日 | 2004年に全国の医療機関から日赤へ報告された輸血後HBV感染疑い症例の現状とその傾向について解析した。 |
| | | | | | | | | | | | | C型肝炎 | J Clin Microbiol 2005; 43: 4413-4417 | HCV陽性患者の唾液及び歯肉溝滲出液(GCF)中のHCV-RNAを定量したところ、18例中14例で、唾液検体では陰性であったが、GCFではHCV-RNAが認められた。また26例中20例で唾液中よりGCF中のHCV-RNA値が高かった。HCVの感染経路を考察する必要がある。 |
| | | | | | | | | | | | | C型肝炎 | The 43rd Annual Meeting of IDSA 2005年10月6-9日 | 2003年3月~4月にかけて、あるペインクリニックで3回の処置を受けた急性C型肝炎患者を調査した。感染リスク患者35例中4例が新たにHCVに感染していた。複数回使用したリドカインのパイアルが汚染されていたためと考えられた。 |
| | | | | | | | | | | | | E型肝炎 | J Med Virol 2006; 78: 473-475 | 2005年に、英国国内で感染したE型肝炎の症例が、バーミンガム市内の病院で8例発見された。E型肝炎は英国ではまれな疾患と考えられており、通常は流行地への渡航後に発症する。急性肝炎の患者すべてに、渡航歴とは無関係にHEVの可能性を考慮する必要がある。 |

| No. | 受理日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----------|-------|--------|---------|---------|------|-----|------|----|----|--------|---------|---|---|
| 120 | 2006/4/26 | 60120 | 日本赤十字社 | 新鮮凍結人血漿 | 新鮮凍結人血漿 | 人血液 | 日本 | 有効成分 | 有 | 有 | 無 | HIV | J Med Virol 2006; 78: 311-317 | ドイツで初めてB/Gサブタイプ間組換え型ヒト免疫不全ウイルス1型(HIV-1)が同定された。このウイルスは、NucliSense HIV-1 QT assay (Organon Tecknika/bioMerieux)では検出不能であり、Monitor v1.5 test (Roche Molecular Systems)ではLCx HIV RNA Quantitative assay (Abbott Laboratories)に比べ有意に低値を示した。プライマーとプローブ結合部位でのヌクレオチドの不整合が、定量差の原因である。HIV-1の遺伝的多様性がアッセイにおける検出と定量に影響を与えることに注意すべきである。 |
| | | | | | | | | | | | | 細菌感染 | Clin Microbiol Infect 2005; 11: 919-924 | スペインの2つの大病院で行われた成人における肺炎連鎖球菌菌血症回顧試験で、1020件中108件(10.6%)が病院内肺炎球菌血流感染(NPBI)と同定された。この内77例のデータが分析可能であったが、入院後、血液培養が陽性になるまでは3~135日(中央値17日)で、基礎疾患は悪性腫瘍(31%)、慢性閉塞性肺疾患(28.6%)、心不全(16.9%)、慢性腎不全(15.6%)、肝硬変(13%)、HIV感染(13%)であった。患者の31.2%が重度の敗血症、11.7%が敗血症ショック、3.9%が多臓器不全を呈した。原因菌の血清型のうち、78%は23価多糖体ワクチンに含まれていた。35名(45.5%)の患者が死亡し、そのうち21名(27.3%)がNPBIに関連すると考えられた。 |
| | | | | | | | | | | | | 細菌感染 | Transfusion 2005; 45: 1845-1852 | 2004年3月にアメリカ赤十字の36の地域血液センターすべてにおいて、成分採血由来の血小板製剤における細菌汚染についてルーチンの品質管理試験を行った。細菌試験の最初の10ヶ月で350,658例中226例が初期陽性であった。初期陽性のものにつき再度検体採取したところ、68例で細菌汚染が確認され、陽性率は0.019%であった。単離された細菌はブドウ球菌属(47.1%)、連鎖球菌属(26.5%)、グラム陰性菌(17.6%)であった。スクリーニングで陰性であった成分に対して、敗血症性輸血反応と疑わしい症例が3例特定され、これらはすべてコアグララーゼ陰性ブドウ球菌が原因とされた。 |
| | | | | | | | | | | | | 細菌感染 | Transfusion 2006; 46: 305-309 | 血小板供血症の長い、無症候性の58歳男性由来の血小板が単球症リステリア陽性であった。パルスフィールドゲル電気泳動パターンはCDCデータベース中の他の2例の単球症リステリア分離株と一致したが、疫学的な関連性は見られなかった。 |

| No. | 発症日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|--------|----------|--|---|
| | | | | | | | | | | | | 感染 | Eurosurveillance 2005; 10(11): 051110 | 1999年以来、スウェーデンでは梅毒症例数が増加している。男性と性交渉する男性の間で激増しているため、2004年は前年比7%増の192例で、1980年代半ば以来最高となった。感染の60%は男性間性交渉、38%は男女間性交渉によるもので、約半数(97例)がストックホルム郡で報告されている。ストックホルム郡外の症例のうち2例は海外で血液製剤により感染した。 |
| | | | | | | | | | | | | マラリア | ProMed20051015-0070 | フランス人旅行者1名が2005年8月～9月ドミニカ共和国東部を旅行した後に熱帯性マラリアを発症した。マラリア薬の服用歴はない。過去12ヶ月以内に輸血、臓器移植歴もない。 |
| | | | | | | | | | | | | インフルエンザ | AABB Weekly Report 2006; 12(2): 1-3 | 2006年1月5～6日に米国保健省血液安全安定供給諮問委員会で、インフルエンザの大流行とその血液供給に及ぼす影響について議論された。特に短期生存型血小板の供給が脅かされることが強調された。また血液供給者の潜在的ウイルス感染問題も含めて、安全な血液供給に関する研究がさらに必要であるとされ、保健省が取り組むべき対応策を可決した。 |
| | | | | | | | | | | | | 鳥インフルエンザ | Nature 2005; 437: 1108 | 2005年2月、ベトナムのトリインフルエンザ感染者においてオセルタミビルに耐性を示すH5N1型ウイルスが発見された。患者は予防量から開始し、のち高用量(治療量)投与され、回復した。高用量投与後はウイルスは分離されなかった。フェレットに感染させた実験で、オセルタミビル耐性ウイルスはザナミビルには感受性を示した。 |
| | | | | | | | | | | | | 鳥インフルエンザ | WHO http://www.who.int/csr/don/2006_02_21b/en/index.html | トリインフルエンザの流行がアジア、アフリカ、ヨーロッパの国々に広がっている。2006年2月以降に初めてトリのH5N1感染を報告した国は、イラク、ナイジェリア、アゼルバイジャン、ブルガリア、ギリシャ、イタリア、スロベニア、イラン、オーストリア、ドイツ、エジプト、インド、フランスの13カ国にのぼる。 |
| | | | | | | | | | | | | パルボウイルス | Clin Infect Dis 2005; 41: 1201-1203 | パルボウイルスに急性感染後のウイルス動態の再評価により、症状が早期に消失したにもかかわらず、本ウイルスは宿主から急速には除去されないことが示された。 |

| No. | 採掘日 | 場所 | 報告書名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|--------|-----------------|-------------------------------|--|
| | | | | | | | | | | | | クロイツフェルト・ヤコブ病 | J Virol 2006; 80: 322-331 | 酸性ドデシル硫酸ナトリウム(SDS)によるプリオンの不活性化について検討した。ハムスターSc237プリオンおよびヒト散在性クロイツフェルト・ヤコブ病(sCJD)プリオンの酸性SDS暴露による不活性化には、SDS濃度、暴露期間、温度が関係した。ヒトsCJDプリオンはハムスターSc237プリオンに比べ、不活性化に10万倍以上抵抗性を示した。ステンレス鋼線に付着したヒトsCJDプリオンは酸性SDSとオートクレーブの併用で除去された。この知見は手術器具や歯科用機器などのプリオン不活性化に適したシステムの基礎となる。 |
| | | | | | | | | | | | | 異型クロイツフェルト・ヤコブ病 | Nat Med 2005; 11: 982-985 | PrPscをPrPcで増幅するPMCA(protein misfolding cyclic amplification)法を自動化し、PrPscの増幅率を向上させた。標準的な検出方法で140PMCAサイクルで感度が6600倍上昇、2回連続で繰り返した場合、感度が1000万倍に上昇し、PrPscの8000分子相当が検出可能となった。この方法で、スクレイパー感染ハムスターの血液中PrPsc検出に成功した。血液中でPrPscが生化学的に初めて検出され、プリオン病を早期診断するための非侵襲的方法の開発が見込まれる。 |
| | | | | | | | | | | | | 異型クロイツフェルト・ヤコブ病 | Nature 2005; 437: 257-261 | 伝達性海綿状脳症(TSE)におけるPrPを含む凝集体のサイズと、感染性及び変換活性との関係を調べたところ、14-28PrP分子に相当する凝集塊を持つ非線維粒子がTSEの最も有効なイニシエーターであることが示唆された。 |
| | | | | | | | | | | | | 異型クロイツフェルト・ヤコブ病 | J Virol 2005; 79: 13794-13796 | 慢性消耗病(CWD)感染ミールジカの脳組織を、リスザルの脳内に接種したところ、リスザルは進行性神経変性疾患を発現した。リスザルの脳組織にはPrPresが検出され、海綿状変性が認められた。霊長類にCWDが感染した初めての報告である。 |
| | | | | | | | | | | | | 異型クロイツフェルト・ヤコブ病 | Nat Med 2005; 11: 1137-1138 | イタリアのサッサリ地方で飼育されている818頭のヒツジについて調べたところ、そのうち261頭がプリオン病に対する感受性を与えるPrnp対立形質を有していた。7頭が明らかなスクレイパーであったが、脳、リンパ節、扁桃腺でPrPScが検出された。スクレイパーのヒツジ全てと無作為に選んだ健康なヒツジ100頭について乳腺を組織学的に調べたところ、乳腺炎とスクレイパーを併発していた4頭では乳腺においてPrPScが検出された。30 km離れた別の群れのヒツジ272頭についても同様の調査を行ったところ、1頭が同様の所見を呈した。慢性的な炎症とスクレイパーの併発により、PrPScの沈着が予期せぬ組織に広がることを示された。 |

| No. | 受理口 | 課名 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正 使用 措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|----------------|-------------------------|---|--|
| | | | | | | | | | | | | 異型クロイツ フェルト・ヤコブ 病 | ProMED20060112 -0070 | 英国保健省の月間統計によると2006年1月6日時点でCJD死亡患者総数(BSEと関連があると思われるvCJDを含む)は153例で、内訳はvCJD確定例における死亡患者109例、vCJD可能性例における死亡患者(神経病理学的に未確定)43例、vCJD可能性例における死亡患者(神経病理学的確定実施中)1例であった。存命中のvCJD患者は6例で、vCJD確定例および可能性例総数は159例で前月から変化はなかった。 |
| | | | | | | | | | | | | 異型クロイツ フェルト・ヤコブ 病 | 英国保健省 Press Statement http://www.hpa.org.uk/hpa/news/articles/press_releases/2006/060209_cjd.htm | 輸血と関連したvCJDの新たな症例が見つかった。患者は、供血後20ヶ月でvCJDを発症したドナー由来血液の輸血を受け、その約8年後にvCJDを発症した。この患者は存命中で、国立プリオン病院の医師による治療を受けている。この症例は輸血関連vCJD伝播としては3例目であり、vCJDが輸血によってヒト-ヒト感染しうることを示す新たな証拠となるだろう。これら3例は、血漿分画製剤の投与ではなく、すべて血液成分の輸血と関連している。この患者は、英国で供血後にvCJDを発症したドナーから輸血されたことが判明し生存している約30人のうちの一人だった。対象者は全員vCJD暴露の可能性のあることを通知され、手術などの医療措置を介したvCJD伝播の危険を減らすための予防措置を講じるよう求められている。 |
| | | | | | | | | | | | | ウイルス感染 | J Clin Microbiol 2005; 43: 5428- 5434 | 米国で1987年から1996年の間にHIV感染小児患者57例から採取し、凍結保存した末梢血単核細胞(PBMC)と2002年から2003年に健常者19例から採取した新鮮PBMCにおいてヒトパピローマウイルス(HPV) DNAを調べた。患者8例と健常者3例がHPV型16ゲノムの2つのサブグループの大部分に陽性であり、これら11のPBMC検体すべてで検出されたHPVゲノムはエピソーム型として存在した。PBMCはHPVのキャリアであり、血液を介してHPVを広めるおそれがあることが示唆された。 |
| | | | | | | | | | | | | ウイルス感染 | ProMED20060205 -0040 | インド洋西部でチクンゲンヤウイルスによる感染症が流行している。レユニオン島では2006年1月下旬の1週間だけで1万5千人増え、計5万人に達した。モーリシャス当局はウイルスを媒介するヒトスジシマカの駆除を決定した。 |

| No. | 受種日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|--------|-----------|-----------------------------------|--|
| | | | | | | | | | | | | コロナウイルス感染 | Science 2005; 310: 676-679 | 2004年3月から12月に、中国の4地区から408匹のコウモリを集め、血液、糞、唾液を採取し、血清検体および糞または唾液由来cDNAを、各々独立に、異なった方法で、二重盲検により分析した。その結果、ある種のコウモリが重症急性呼吸器症候群(SARS)の病原体であるSARSコロナウイルス(SARS-CoV)に非常に近いコロナウイルスの自然宿主であることが明らかになった。これらのウイルスはSARS様コロナウイルス(SL-CoV)と名づけられ、ヒトやジャコウネコから分離されたSARS-CoVより遺伝的多様性が高い。ヒトやジャコウネコから分離されたSARS-CoVは系統発生的にSL-CoVの範疇に入り、SARS発生の原因ウイルスがSL-CoV群の一員であったことを示す。 |
| | | | | | | | | | | | | コロナウイルス感染 | Clin Infect Dis 2006; 42: 634-639 | 新規ヒトコロナウイルスHKU1は呼吸器及び腸疾患に関連する可能性があり、状態の不良な患者における持続性の無症候性感染との関連が考えられる。 |
| | | | | | | | | | | | | エボラ出血 | Nature 2005; 438: 575-576 | ガボンおよびコンゴで2001年から2003年にかけて発生したヒトと大型霊長類におけるエボラ流行時に採集された1030の小型脊椎動物において、エボラウイルスについて調べた。エボラウイルスに特異的な抗体が3種類のコウモリの血清中で検出された。エボラウイルスのヌクレオチド配列が同じ種類のコウモリの肝臓と脾臓で検出されたが、腎臓、心臓、肺からは検出されなかった。また他の動物からは検出されなかった。驚くべきことに、抗体陽性の動物はすべてPCR陰性であり、PCR陽性の動物はすべて抗体陰性であった。これはPCR陽性の動物は感染から日が浅く、免疫反応が検出できる前に検査されたためと思われる。 |
| | | | | | | | | | | | | デング熱 | ProMed20050928-0040 | 2005年9月、ベネズエラ、シンガポール、カリブ海マルチニーク島、マレーシアでデング熱が流行している。死亡者も多数でている。 |
| | | | | | | | | | | | | デング熱 | Blood 2005; 106: Abstract #5331 | 骨髓移植後の最初の再発時に敗血症と不可逆性ショックを発症し、死後解剖でデングウイルス4型感染が判明した急性リンパ性白血病(ALL)小児患者について報告する。1994年11月にプエルトリコで兄弟からの骨髓移植を受けた6歳の少女は移植後5日目に全身紅斑、6日目に発熱を発症し、抗生物質の投与にかかわらず、不可逆的ショックを起こし、11日目に死亡した。死後解剖で血液、腹水、肝臓、脾臓からデングウイルス4型が検出され、PCRで確認された。ドナーの血液をさらに検査したところ、デングウイルス4型のIgM抗体が検出され、患者ウイルスの培養は、ドナーの急性力価と一致した。デングウイルス感染は流行地域で輸血や骨髓移植を受けた患者の死亡原因となりうる。 |

| No. | 受理日 | 番号 | 報告者名 | 一般名 | 生物由来成分名 | 原材料名 | 原産国 | 含有区分 | 文献 | 症例 | 適正使用措置 | 感染症(PT) | 出典 | 概要 |
|-----|-----|----|------|-----|---------|------|-----|------|----|----|--------|-------------|---|--|
| | | | | | | | | | | | | ウエストナイルウイルス | 朝日新聞 2005年10月3日 | 厚生労働省は2005年10月3日、米国から日本帰国した男性会社員が米国で流行中のウエストナイル熱と診断されたと発表した。国内初の感染例である。 |
| | | | | | | | | | | | | ウエストナイルウイルス | CDC/MMWR 2005; 54(Dispatch): 1-3 | 2005年9月、米国で共通のドナーから臓器移植を受けたレシピエント4名中3名にWNV感染が確認された。ドナーから採取された血清および血漿サンプルの検査でWNV-IgM抗体、IgG抗体は陽性を示したが、WNV-RNAは陰性であった。 |
| | | | | | | | | | | | | ウエストナイルウイルス | GDC http://www.cdc.gov/ncidod/dvbid/westnile/qa/transfusion.htm | 2005年8月-9月にニューヨークとペンシルバニアで臓器移植を受けたレシピエントがウエストナイルウイルス感染した件に関連するQ&A。臓器移植による感染は、ドナーの血液が核酸増幅試験陰性、IgM、IgG抗体陽性の場合にも起こる可能性がある。 |
| | | | | | | | | | | | | B型肝炎 | 第47回日本臨床血液学会総会 2005年9月17-19日 | 化学療法および造血細胞移植療法実施後に、重篤なB型肝炎を生じた症例を複数経験した。全例とも治療前のHBs抗原は陰性であり、治療中の感染はなかった。HBs抗体およびHBe抗体陽性の症例があったことから、免疫状態の変動に伴いHBVの再活性化が生じたと推測される。 |
| | | | | | | | | | | | | B型肝炎 | 第47回日本臨床血液学会総会 2005年9月17-19日 | 移植前HBsAg陰性、HBsAb陽性で、同種造血幹細胞移植を受けた患者6例のうち1例が、移植後15ヶ月で劇症B型肝炎を発症した。このような患者ではHBウイルスをモニタリングする必要があると考えられる。 |
| | | | | | | | | | | | | B型肝炎 | 第29回日本血液事業学会総会 2005年10月12-14日 | 2004年に全国の医療機関から日赤へ報告された輸血後HBV感染疑い症例の現状とその傾向について解析した。 |
| | | | | | | | | | | | | C型肝炎 | J Clin Microbiol 2005; 43: 4413-4417 | HCV陽性患者の唾液及び歯肉溝滲出液(GCF)中のHCV-RNAを定量したところ、18例中14例で、唾液検体では陰性であったが、GCFではHCV-RNAが認められた。また26例中20例で唾液中よりGCF中のHCV-RNA値が高かった。HCVの感染経路を考察する必要がある。 |
| | | | | | | | | | | | | C型肝炎 | The 43rd Annual Meeting of IDSA 2005年10月6-9日 | 2003年3月~4月にかけて、あるペインクリニックで3回の処置を受けた急性C型肝炎患者を調査した。感染リスク患者35例中4例が新たにHCVに感染していた。複数回使用したリドカインのバイアルが汚染されていたと考えられた。 |